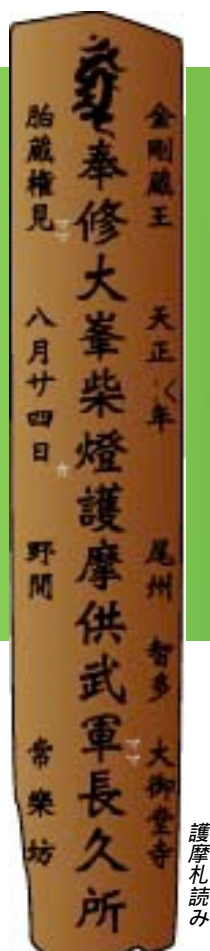




埋蔵文化財愛知

no.50



護摩札読み



護摩札部分

おおわき
大脇城跡から出土した
てんしょう
「天正四年」（1576年）及び
おおみどうじ
「大御堂寺」が記された護摩札

高さ51.0cm、肩幅9.4cm、厚さ0.8cmの圭頭形をした護摩札は、大脇城の主郭を区画する堀の底から、文字面が下になった状態で出土した。

文字部分に墨はほとんど残っていないが、墨書個所の腐食の進行度合いが遅いために周囲よりわずかに盛り上がった状態になっている。ただ、「金剛蔵王」部分には、かろうじて朱が確認できる（ 頁参照）。

遺跡調査速報

おおわき
大脇城跡

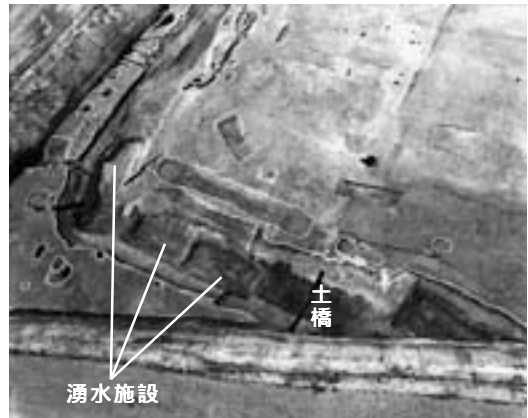
豊明市栄町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

発掘調査は、伊勢湾岸道路・第二東海自動車道建設に伴う事前調査として昨年8月から継続されている。今年度の調査面積は、2,800㎡である。

昨年度の調査では、城館の外郭を区画する幅約3m、深さ約2mの堀が検出された。本年度の調査区では、堀によって区画された、一辺約40mの方形の主郭部分が確認された。堀は西・南・東側が検出されたが、南側の堀が最も規模が大きく、幅約5m、深さ約2mを測る。さらに、土橋とみられる高まりが認められるほか、堀底に湧水施設と考えられる大型の土坑が掘削されている。正戸川に面した東側の堀にも、土橋とみられる開口部が認められる。また、堀の外側、特に主郭の西方からは多くの溝・井戸・土坑・掘立柱建物などが検出された。

主な出土遺物は、内耳鍋などの土器、瀬戸・美濃・常滑窯産の陶器、下駄・独楽などの木製品、銭貨、刀装具である。また、表紙の護摩札以外にも7点の木簡が出土している。

(埋文セ 中野良法)



主郭を区画する溝(西側と南側)



主郭を区画する溝(東側)

しがこうえん
志賀公園遺跡

名古屋市北区中丸町
(財)愛知県埋蔵文化財センター

志賀公園遺跡は名古屋市の北部、庄内川と矢田川の合流する地点の南側に展開する沖積地に立地する。標高は現況で5m前後。発掘調査は住宅建設の事前調査として、昨年度から実施している。昨年度の調査から調査区南に隣接する志賀公園内に推定されている戦国時代の志賀城に関連する遺構・遺物、さらに7・8世紀の遺構・遺物、古墳時代中期の遺構・遺物を確認している。

今年度の調査、97E区上面では、7世紀代の竪穴住居4棟、10×15m以上の掘立柱建物1棟、幅4m前後の大溝を検出した。97E区下面では、弥生時代中期前半の竪穴住居2棟、掘立柱建物4棟、方形周溝墓5基を検出した。竪穴住居の1棟は焼失住居で「松菊里型住居」に類似する形態。円形プランで、中央に楕円形土壇を有し、その両端に柱穴をもつ。主柱穴は4本確認でき、そのうち1ヶ所で柱材と礎板が認められる。床面には筵状の編み物が炭化した状態で見つかった。

(埋文セ 永井宏幸)



弥生時代中期の建物群



「松菊里型住居」に類似する円形住居

NA324号窯群

名古屋市緑区大高町
名古屋市見晴台考古資料館

大高南特定土地地区画整理事業に伴って、平成8年10月～平成9年6月に調査を行った。従来、東植松古窯と呼ばれていた地点だが、詳細は全く不明であった。今回の調査で山茶椀窯4基（A～D窯）より成ることや、築窯途中で廃絶（崩落）した土坑2基などを確認した。いずれの窯も、12世紀後半を前後する時期と考えられ、2～3型式に細分されるようである。これらの内特筆すべきは、平成8年度に調査したA窯で、焼成途中と推定される天井落下によって、山茶椀千枚以上が窯内に残されていた。窯詰め状態をかなり良好に知ることができ、今後の分析に期待が寄せられる。また、4基の中で最新のC窯では、床面下施設として500点以上の山茶椀（大破片）を敷き詰めていた。

同区画整理地内では、平成8年度に灰釉陶器窯1基（NA207号窯）を調査した他、谷をはさんだ別地点の山茶椀窯2基（NA336号窯群）を本年8月まで調査している。NA336号窯群は、NA324号窯群の時期幅の内に収まるもので、両群の関連も興味深いものがある。

（名古屋市見晴台考古資料館 伊藤正人）



NA324号 A窯



NA324号 C窯

はぎひらうえのたん

萩平上ノ段遺跡

新城市川路
新城市教育委員会

萩平上ノ段遺跡は、新城市の北東部、豊川中流域の右岸台地に所在している。この場所は、もともと萩平古墳群として認知されていたが、短期大学誘致事業に先立ち、平成8年9月に試掘調査を行った結果、約30点余りの旧石器が発見され、この地点を「萩平上ノ段遺跡」とし平成9年1月から3月まで本調査を実施した。

調査は、中央に農道をはさみ、西区約1,700㎡、東区約800㎡の計2,500㎡の範囲において行った。重機による表土剥ぎを行うと、赤褐色土が現れこの面から掘り下げを開始した。その結果、西区において3か所の石器集中部、12か所の礫群、11か所の配石が確認され、合計880点の礫と3100点あまりの石器（フレイク類含む）を検出している。また、旧石器以外に、縄文時代の住居跡・集石土坑が各1基ずつ確認された。東区からは、旧石器の散布は認められなかったが、古墳が2基検出された。

今回の調査では、多数の旧石器が検出されたが、ナイフ型石器等の製品がほとんど出土していないため、その時期が確定できなかった。今後の遺物整理に期待がかかるものである。（新城市教育委員会 黒田健二）



石器検出状況



配石

濃尾系甕について

7世紀半ばから突如出現し、濃尾平野一帯に分布する土師器甕。8～9世紀を中心にこの地域の主要な煮炊具として利用される。9世紀後半から甕から鍋へと煮炊具が変革する前段階に濃尾平野を占める謎の甕。



濃尾系甕（一宮市大毛沖遺跡）

濃尾系甕の特徴（名古屋城三の丸遺跡）

写真1

荒々しいケズリ調のハケ調整。器壁を薄くするための技。

写真2・3

底部成形技法。底部内面が有段となる接合技法。濃尾系甕の最も特徴的な部分。



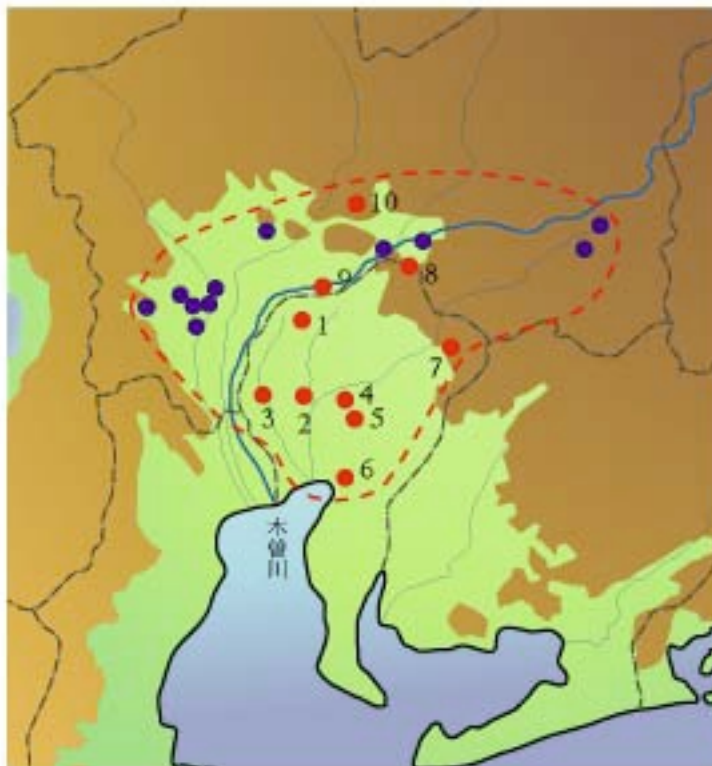
1



2



3



主要遺跡地名表

- 1 一宮市 大毛沖遺跡
- 2 清洲町 清洲城下町遺跡
- 3 稲沢市 儀長正楽寺遺跡
- 4 名古屋市 志賀公園遺跡
- 5 名古屋市 名古屋城三の丸遺跡
- 6 東海市 松崎貝塚
- 7 瀬戸市 品野西遺跡
- 8 岐阜県可児市 宮ノ脇遺跡
- 9 岐阜県各務原市 三井遺跡
- 10 岐阜県関市 重竹遺跡

1. 特徴

濃尾系甕は7世紀代に木曽川水系を中心に出現し、8～9世紀代を中心として濃尾平野一帯に分布する甕のこと。具体的な特徴を以下に示すと……

大きさは大（口径20cm前後、器高40cm前後）と小（口径・器高ともに約15cm以下）の2種。

器形は最大径が体部上位から中位となりやや肩が張る。口縁部は肥厚し、斜め上あるいは水平方向に折れる。体部の調整は器壁を薄くするためケズリ調の荒々しいハケ調整を行う。内面の調整は頸部に荒い横方向のハケ調整、体部内面は縦方向の指ナデあるいは指オサエで、体部下半は板ナデを行うこともある。

底部成形技法に、「底部内面有段接合技法」を用いる。円盤あるいは皿状の粘土の上に、内面からやや厚めの粘土紐（帯）を積み上げる。成形後の調整を行わないため、底部から1段目あるいは2段目の積み上げの痕跡が段を持つ。これを「底部内面有段接合技法」と呼んでいる。また、底部内面の成形・調整痕跡から粘土積み上げの際、外反防止のため底部付近に絞り込んだ痕跡が見られる。

以上3点の内、底部内面の接合痕跡と体部のハケ調整が最も特徴的で識別のポイントとなる。

2. 分布と時期

濃尾系甕は7世紀中葉、木曽川と飛騨川が合流する可児市周辺で出現したと考えられている。分布は、木曽川流域を中心に濃尾平野に分布する。特に、尾張平野低地部での出土頻度が高いことから「尾張型甕」と呼ばれたこともある。しかし、岐阜県内の関市重竹遺跡・可児市宮ノ脇遺跡・各務原市三井遺跡などから「尾張型甕」と共通する特徴が認められることから、最近「濃尾系（型）甕」と呼ばれることが多い。

濃尾系甕は可児市周辺で出現し、尾張平野低地部では8世紀に入ってから出土頻度が高くなると考えられていた。最近の調査事例から少なくとも7世紀後半には確実に認められることがわかってきた。例えば、瀬戸市品野西遺跡・名古屋市志賀公園遺跡などがあげられる。

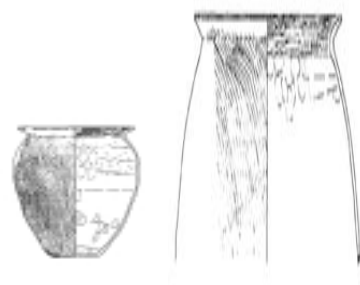
時期的な変遷もほぼ尾張と美濃で同様な変化が認められる。7世紀代の濃尾系甕は器壁が口縁部と変わらず厚手となり、体部の調整もケズリ調の荒々しいハケ調整ではなく、比較的整ったハケ調整となる。底部成形も丁寧な作りで、8世紀以降の底部とは異なり、比較的底径が大きい。8世紀代以降は前記した特徴が認められ、濃尾系甕が定型化する。9世紀後半になると、急速に濃尾系甕は姿を消す。尾張平野では伊勢系甕に系譜が追える伊勢系鍋や清郷型鍋が煮炊具の主体を占めるようになる。

3. 甕から鍋へ

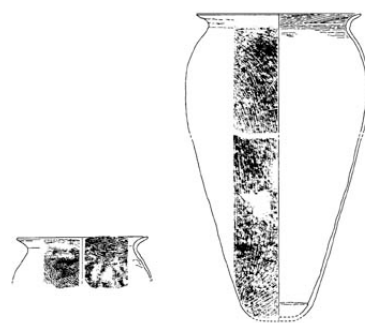
濃尾系甕が主体を占める煮炊具の時代は、竪穴住居に造り付け竈が調理施設として利用される時代でもある。濃尾系甕が出現する前代、6～7世紀代に主体を占める伊勢系甕の時代から竪穴住居に造り付け竈は調理施設の主流となる。これを受け継いで7～9世紀にかけて長胴の大甕と小甕のセットが煮炊具の主流であった。ところが、9世紀後半になると急速に竪穴住居に付設していた造り付け竈が激減する。その結果は煮炊具にも現れ、「甕から鍋へ」と形態の変革が起きる。これら一連の現象は居住形態の変革そのものだ。濃尾系甕の隆盛する8～9世紀は居住形態が竪穴住居から平地住居あるいは掘立柱住居へと変化する過渡期に相当する。まさに濃尾系甕は居住空間の変革期に隆盛し、煮炊具の一時代を築いた調理具と言える。（埋文セ 永井宏幸）



一宮市大毛沖遺跡

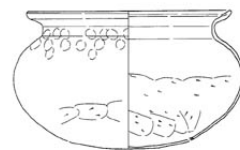


瀬戸市品野西遺跡



可児市宮ノ脇遺跡

甕から鍋へ

清郷型鍋
（清洲町 清洲城下町遺跡）伊勢型鍋
（春日井市 松河戸遺跡）

スケールはすべて1/10です

(財)愛知県埋蔵文化財センター平成9年度埋蔵文化財速報展 一宮市博物館10周年記念夏季企画展

「埋蔵文化財速報展」

7月26日(土)～8月31日(日)の期間、開館10周年を迎えた一宮市博物館において開催。県内調査では2例目の発見となる八王子遺跡の銅鐸出土状況のレプリカをはじめ、東海北陸自動車道建設に関連して調査された門間沼遺跡・大毛池田遺跡など一宮市近辺の遺跡出土品を中心に展示。(入館者約4000人)



「埋蔵文化財講演会・講座」

一宮市博物館講座室にて、8月3日(日)奈良大学文学部教授酒井龍一氏を迎え「銅鐸と弥生社会」と題して講演会を開催。最近の出土資料の紹介と銅鐸研究の現状についてわかりやすく解説された。



また8月9日(土)・17日(日)両日には展示資料の調査担当者による埋蔵文化財講座を開催。(参加希望者多数のため、いずれも100名抽選とした)。



イベントいろいろ

期間中毎週日曜日には、一宮市博物館の企画で、縄文の布を編む・弥生の布を織る・石器を作る・縄文クッキーや赤米の試食など6項目について体験するイベントが行われました。夏休みの親子づれの参加者が多く、石焼きの縄文クッキーの味も概ね好評でした。

埋蔵文化財愛知 no.50

発行 平成9年10月9日

編集 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町前ケ須新田字野方802-24

TEL 0567-67-4161～4163 FAX 0567-67-3054

印刷 クイックス